

紙つぶて

三年前となる二〇一〇年九月二十九日、ネパール・ダウラギリで登山家三名の雪崩による遭難の悲報が入り、その中に私たちの山頂班の一人、山本季生班員の名前がありました。〇七年、NPOが初めて気象庁から測候所の一部を借りて活動を始めた時、岩崎洋山頂班長が紹介した最初の若い山男が山本さんでした。

ある朝、東京・麴町の狭い事務所の隅の寢袋からのっそりと現れ、それ以来、山頂の測候所管理のマニユアル作りが始まったのでした。「ダンドリ山」のあだ名で呼ばれたように段取りを重視するやり方で「開所までの段取り」「運営覚書」「閉所段取り」などがどんどん作られました。事務能力抜群の山男として私たちの活動を力強く引っ張ってくれました。

## 山本季生さん

彼はまた驚くべき力持ちで、全体で一・五トになる国立環境研の蓄電池百個を建物の二階まで仲間と担ぎ上げたり、〇八年には滑落で骨折した登山者を神社まで担ぎ下ろしました。工作が得意で、太陽光パネルを仮設しての発電量測定では、終了後外すのが惜しいほどの細工でした。

完璧主義者でもあった彼は周りどぶつかることも度々ありましたが、明るい性格と何よりも山頂は実力がモノをいう世界です。彼の遭難が分かると、お世話になった研究者たちにシヨックが走りました。忘れられない山頂研究の恩人です。享年三十六歳。新婚早々のさこみさんが残されました。



（土器屋 由紀子＝富士山測候所を活用する会理事）